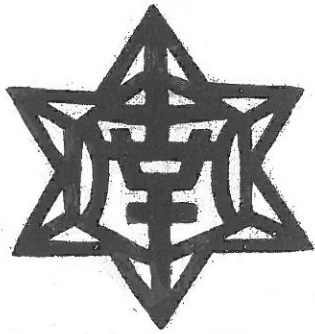


校 章



校章訓 「この校章をつける者は、祖先の開拓者精神に燃え、水の力を力とし、水の心を心とし、水の形を形として社会必須の人となり、永遠の希望に生きること日なたの如く生き生きと明朗発刺、その人格の完成を期するものである。」

形の説明 真中の南は校名を表し、六角は結晶の安定形を表す。六方に走る線は水を表し、全体の六菱形は雪の結晶であると共に水の働きに応じた人間の働きである。

校章ができたのは大正4年であるが、その後昭和37年、校章制定の趣旨から、その由来・意義を明らかにしておく事の必要性により調査し、かつ教育的意義を考察して「校章訓」を制定した。

本校校章の原型は、“水道章よりとりたるものなり”とある。中の星型は「水」の文字を図案化した物で、本市水道開設当時の町長の高柳広蔵氏の創案になる由。本市は、その昔「ゆあみさわ」といわれたと伝えられるごとく、湿地帯で、その上泥炭地のため、出水に苦しみ、飲料水に悩み、当市の発展は一面水との苦悩の歴史でもある。その上寒地と雪との闘いも、忘れることのできない現実である。

このような背景の中で、昭和37年、校章に対する教育的意味付けをした訳であるが、当時の校長室に「水訓」があり、「自ら活動して他を動かすは水なり。常に己の進路を求めてやまざるは水なり。障害にあい激して、その勢力を百倍し得るは水なり。自ら潔うして、他の汚れを粗い清濁併せ容るるの量あるは水なり。洋々として大洋を満たし・・・」とある。

また、「南」は「皆見」で、日光明らかな意であるから、人の美点を認め温かい愛情に結ばれて、明るい人生を期待するものであると配した。